

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520905

研究課題名(和文) 村方文書を通して見る韓国農村の100年

研究課題名(英文) Reading Village Features in the Documents of Kye Associations over the Past 100 Years

研究代表者

嶋 陸奥彦(Shima, Mutsuhiko)

東北大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：30115406

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)： 研究対象の村は、かつては身分の異なる人々の住む二つ別々の村だったが、1950年代に一つの村に統合された。本研究では契と呼ばれる村の相互扶助組織の文書から、過去百年間の村の姿を読み解こうとした。

20世紀初頭以来組織運営されてきた8つの契の改編過程を再構成した。また文書の詳細な分析を通して、住民の移動(転出入)が組織に及ぼす影響、20世紀前半の二つの村の住民相互間、および異なる身分階層の人々間の関係、一つの村への統合過程などを考察した。

その結果、これまでの韓国研究で自明視されてきた自然村概念、農村住民の定住性、両班・常民の身分関係の実態などについて、改めて検討し直す必要性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)： The village under consideration used to be two separate villages with residents of different socio-cultural strata 両班/常民. Present research tried to read the features of the village(s) over the past century in the documents of common-interest associations, called Kye 契, of the village(s).

Re-organization processes of eight associations have been traced. Detailed analysis of the documents have revealed the following: significance of geographical mobility of the residents on the organizations, relationships between the residents of the two former villages as well as belonging to different socio-cultural strata, and the process of integration into one village.

The new findings call for reconsideration of several assumptions so far taken for granted in Korean studies: the concept of 'natural village' 自然村, geographical stability of rural population, and distinction between socio-cultural strata as manifested in daily village life.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 韓国 農村 契組織 自然村概念 人口移動 身分関係

### 1. 研究開始当初の背景

筆者は1974年8月から1975年8月にかけて、韓国全羅南道羅州郡の青山洞(仮称)という農村でフィールドワークを行った。青山洞には明確な地理的範囲があり、そこに住む全ての人々(世帯)の参加する部落総会で里長(行政機関に対する村の代表者)を選出するとともに、村内での賃金(日雇い労賃)の額を決定し、年一回の道路補修を共同労働で行っていた。当時、「青山洞の人」であることを前提に、葬儀における協力のために作られた「契」という相互協力組織が三つあった。いずれも個人的に組織する契とは区別されて、「村の契」という意味づけが与えられていた。青山洞を自然村的な社会単位として研究対象にすることに疑問を感じることはなかった。

自然村という概念は、鈴木榮太郎が日本の農村研究を通して提起したもので、植民地統治期末期に京城帝大に赴任して調査を始めた朝鮮の農村に対しても、同じ概念を当てはめることができるとした。解放後の韓国の農村研究においてもこの概念が広く使われてきた。

しかし青山洞という地名には広狭二つの用法があった。筆者がフィールドワークの対象としたのは広義の青山洞で、1974年8月の時点で、背後の山の麓に東西にならぶ二つの集落を中心に62世帯が暮らしていた。このうち30世帯が暮らす西側の集落が狭義の青山洞で、27世帯が暮らす東側の集落(東山村)とははっきり区別されていた。さらに別の地名を持つ二つの地区にそれぞれ2世帯と3世帯が暮らしていた。上述の三つの契には広義の青山洞の人々が参加していたが、それらとは別に、東山村の住民だけが加入する泉契という組織があった。これは葬儀における協力ではなく、東山村に一つしかなかった飲料水の泉を管理するためのものだった。広義の青山洞という地縁的社会単位のなかに、東山村というもう一つの地縁的社会単位が別途に存在しているような状態だったわけである。

これについては、植民地統治からの解放直後まで、青山洞と東山村は別々の村だったとフィールドワークのときに繰り返し聞かされていた。特に強調されていたのが身分の違いだった。青山洞(狭義)は両班(上位身分階層)の村だったが、東山村は常民の村だったという。しかし身分関係は微妙な問題であり、追求することは差し控えるべきだと思われるし、また村の過去の状態を確認できるような資料があるとも思われなかったので、70年代の状況に焦点を当てて調査を行った。それは当時の人類学における常套的なやり方でもあった。

その後、2010年末に青山洞を再訪したとき、20世紀初頭に遡る契冊(契の記録文書)が存在することを初めて知り、その複写閲覧

を許可されることになった。そこには70年代のフィールドワークのときにはまったく耳にすることのなかったような情報が含まれていた。この新しい資料の出現が今回の研究を可能にした。

### 2. 研究の目的

新たに利用可能になった契冊資料を用いて、20世紀初頭以来の100年にわたる村の契の再編過程を再構成するとともに、記録の内容を詳細に分析することによって、20世紀前半の村の姿を見直してみるというのが今回の研究の課題である。

### 3. 研究の方法

分析の対象とする文書(契冊)は次の8つの契に関するものである。

契の名称	存続期間
(1) 丁酉洞中親友契	1897 - 1973年
(2) 丙辰喪布契	1916 - 1956年
(3) 丙寅親友契	1926 - 1956年
(4) 丁酉洞中為親契	1957 - 1994年
(5) 丙辰為親契	1956 - 1994年
(6) 乙未布帳契	1955 - 1974年
(7) 甲戌洞中為親契	1994 - 存続中
(8) 大洞契(通称泉契)	? - 存続中

(2)から(8)までは葬儀における協力のための契である。(9)は、記録が残っているのは1905年以降だが、それより以前から続いていたものとみられる。(1)は表紙と名簿しか残っていないので、目的や運営方式を知ることはできない。

今回の研究においてもっとも力を注いだのは、これらの契冊の記録内容を全て電子ファイルに書き起こすという膨大な基礎作業であった。

契冊に記録されている内容は、契の名称、規約、構成員名簿、毎年の運営記録に大別することができる。そのうち名称は表紙と規約の第一条に記され、規約と名簿は契冊の最初の部分にまとめられている。規約には契の目的と運営の原則が記されている。

契冊の大部分を占めるのが毎年の運営記録であるが、これは毎年秋に一回(場合によっては春秋二回)開催される定期集会の時の記録で、基本的に次のような順序で記載されている。

- 集会の開かれた年月日
- 前年に貸し出した基金の元利合計額
- 集会日までの一年間の支出(集会当日の飲食費を含む)
- 差引残高 = 新規貸出金額
- 新年次の貸出記録(借用人名、借用金額、連帯保証人名)
- 新年次の役員名

契についてのこれまでの研究は、契が組織される目的と運営の原則を中心とするものがほとんどで、各年次の記録内容に踏み込んだものはほとんど見られない。それに対して今回の研究では、対象とした契が個人的なものではなく、「村の契」という性格のものであることに注目し、それぞれの契について、毎年の記録内容のうち、借用人、連帯保証人、役員として現れる人の名前を時系列的につなぐことによって、構成員の移動(新規加入、脱退など)を追求し、さらに同時期に存在する複数の契の構成員を対比することによって、村の住民の移動(転出入)に迫ることを試みた。これが今回の研究を特徴づける方法である。

#### 4. 研究成果

契冊分析の結果は三つのポイントにまとめることが出来る。

##### (1) 住民の移動

20世紀前半に二つ別々の村だった時期について、それぞれの村の住民の転出入の速度に大きな違いがあったことが明らかになった。(その背後に地主・小作制度がある。)この違いが青山洞(狭義)と東山村それぞれの村のノ村を中心とする契のあり方に決定的な違いをもたらしたとみられる。従来の韓国農村研究においては、農民は定住者であるということ暗黙の前提となっていた。しかし筆者は朝鮮時代の戸籍分析を通して、当時の農村人口の高い流動性を確認したことがある。今回の契冊という村方文書の分析からも同様のことが確認される。近世以降の農村研究において、住民の移動に目を向けることの重要性が浮かび上がる。

##### (2) 身分制

1970年代の調査時には、植民地統治からの解放直後まで、村内において身分による差別が厳しかったことが強調されていた。ところが今回の契冊の分析によって、異なる身分に属する人々が同じ契の構成員になっていたことが確認された。身分関係についての従来の研究は、支配/被支配、あるいは優越/反発という視角からの分析が多かった。しかし今回の研究からは、身分の違いが日常生活の場でどのように表出していたのか、再検討する必要が提起される。

##### (3) 「自然村」概念について

20世紀前半の葬儀のための契には、「別々の村だった」といわれていた青山洞(狭義)と東山村の両方の住民が参加しており、契組織は二つの村にまたがっていた。村は開かれていた。他方、葬儀のための契に参加するのは比較的長期に居住する人々であり、短期的に転出入する人々は参加しなかった。東山村の住民の多くは非常に短期(5年以下)で転出入する人々だった。同じ村の居住者であっても、地縁を基盤とする社会への関与の仕方

が違う人々がいたのである。ここにも移動の問題が表れている。これはまさしく「自然村」の概念で韓国の村を考えることが妥当かどうかという根本的な問いを突きつけることになる。

#### 残された課題

契冊は韓国の社会史研究のための貴重な一次資料となりうる。今回の研究は青山洞の人々が筆者に対して研究資料として契冊の複写を認めてくれたことによって可能になった。その記録内容は個人情報として取り扱いに注意しなければならない性格のものである。しかし契に関する従来の研究では、一つの村について、100年にわたって改編組織されてきた「村の契」の存在などにふれたものはほとんど無い。

筆者の手元にある契冊資料を、個人情報に配慮しながらどのように保存して残したらよいのか、検討しなければならない。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

嶋 陸奥彦 「契冊を通して見る村の姿」、『韓国朝鮮の文化と社会』13号、122-144ページ、2014年(この論文は「契冊」というタイトルで翻訳され、韓国社会史学会の機関誌『』104輯、2014年に転載された。)

[学会発表](計 2 件)

Mutsuhiko Shima, "Korean Studies in Japan", *Korean Studies from Cultural and Social Perspectives: Dialogues with Taiwanese Anthropologists*, National Tsing Hua University, Taiwan, 2013.4.27.

嶋 陸奥彦 「日本の文化人類学における韓国研究と東北大学における韓国研究」、『東北日韓交流フォーラム』東北大学、2014.12.6.

[図書](計 1 件)

Toshiaki Kimura, Mutsuhiko Shima, et.al., *Stratification in Cultural Contexts: Cases from East and Southeast Asia*, Melbourne: Trans Pacific Press, 2013

[産業財産権]  
出願状況(計 1 件)

名称:  
発明者:

権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/anthropology/shima.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

嶋 陸奥彦 (SHIMA Mutsuhiko)  
東北大学・文学研究科・名誉教授  
研究者番号：30115406

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：